

「論理・表現Ⅰ」の指導の在り方に関する一考察
—新課程におけるカリキュラム開発と授業実践を通して—

津久井貴之

群馬大学教育実践研究 別刷
第40号 151～164頁 2023

群馬大学共同教育学部 附属教育実践センター

「論理・表現 I」の指導の在り方に関する一考察

—新課程におけるカリキュラム開発と授業実践を通して—

津久井 貴之

群馬大学共同教育学部英語教育講座

Teaching Methods and Designing Units in English Logic and Expression I — A Study Using Curriculum Development and Teaching Practices in a High School —

Takayuki TSUKUI

Cooperative Faculty of Education, Gunma University

キーワード：「論理・表現 I」、学習指導要領、言語活動、技能統合

Keywords : English Logic and Expression I, Course of Study, language activities, integrated skills

(2022年10月23日受理)

1 序論（「論理・表現」実施の背景）

1.1 新学習指導要領下の位置付け

高等学校学習指導要領（文部科学省，2018a）の2022年度の実施により，小中高の改訂における共通の特徴の1つとして，言語活動を通じたコミュニケーションの資質・能力の育成が求められている。特に，高等学校では複数の技能を統合した言語活動の実施が目標の達成に必要とされている。科目構成も見直され，従来の「コミュニケーション英語」が「英語コミュニケーション」に改変され，「五つの領域別の言語活動及び複数の領域を結び付けた統合的な言語活動を通して，五つの領域を総合的に扱うことを一層重視する必修科目」（文部科学省，2018b，p.8）として設定された。また，「英語表現」の代わりに「話すこと」，「書くこと」を中心とした発信力の強化を図るため，特にスピーチ，プレゼンテーション，ディベート，ディスカッション，まとまりのある文章を書くことなどを扱う選択科目」（文部科学省，2018b，p.8）として「論理・表現」が設定された。新課程の1年生の科目編成を考えると，旧課程の必修科目「コミュ

ニケーション英語 I」（標準履修単位3単位）と選択科目「英語表現 I」（同2単位）が，新課程で「英語コミュニケーション I」（同3単位）と「論理・表現 I」（同2単位）に置き換わっただけのように見えてしまい，学校現場では「科目名の部分的改称」として捉えられてしまう危険性も考えられる。しかし，実際は旧課程の科目が抱えてきた指導上の課題の解決や目指すべき資質・能力の育成に向けた言語活動のより一層の強化，指導と評価の一体化など，今回の改訂の目的を理解した上で，各学校・授業レベルでの指導改善の具体的なアクションが求められている。

本稿では，2つの科目のうち，選択科目「論理・表現」，特に2022年度より実施されている「論理・表現 I」に焦点を当てる。具体的には，筆者が「論理・表現 I」のカリキュラム開発の支援を行う大妻高等学校の指導上の課題や成果を実践研究の途中経過としてまとめるとともに，科目指導の在り方や今後の研究の方向性を考察する。「論理・表現」やその前身となる「英語表現」は，学習指導要領の目標や科目の趣旨と指導の実態の差が大きく，その課題は古くから指摘されてきた。新科目「論理・表現 I」の指導や言語活動

の在り方、科目の方向性や可能性について検討することで、目標と指導と評価の一体化を目指したい。

1.2 「英語表現」の実態と課題

旧科目「英語表現」が発信系の領域をより一層強化した科目「論理・表現」として改訂されたわけだが、本節では、「英語表現」の指導実態や課題について、国の資料や先行研究からさらに細かく見ていきたい。

「英語表現」が抱えてきた最大の課題は、実際のコミュニケーションの機能や場面を無視した文法指導や文法演習・解説に終始する授業と科目の目標と評価の3点が乖離してしまっていることである。これは、高等学校における英語教育と「受験指導」の関係の問題であり、「英語表現」という科目だけが抱えたものではない。1989年告示の学習指導要領で「オーラル・コミュニケーション」(以下OCと呼ぶ)という科目が設定されたあたりから、文法解説・演習を中心とした講義型の授業と科目名及び科目の目標とのギャップが顕在化したと思われる。中央教育審議会の初等中等教育分科会教育課程部会外国語ワーキンググループの資料(文部科学省, 2016)によると、「OC I・II」の見直しとして「英語表現」は、論理的に表現する能力に焦点を当てるとされているが「論理・表現」もその科目変更案の趣旨として、論理的に表現する能力に焦点を当てるとされている。つまり、大きな方向性として課題が解決されずに継続されているということである。資料中の高等学校「外国語」の科目等の見直しという項の要点は以下のとおりである。

- ・中学校との接続が不十分である。
- ・言語活動の割合が低く、文法や語彙の習得に留まっている。
- ・生徒の興味・関心を喚起するために、幅広い話題を扱う必要がある。
- ・「英語表現」の教科書の多くが文法シラバス中心で、科目の趣旨を生かし切れていない。

(文部科学省, 2016, p.16)

また、令和3年度「英語教育実施状況調査」(文部科学省, 2021)は、言語活動の充実と評価における課題を明らかにしている。「英語表現I」を担当する教師の55.5%が、授業に占める言語活動の割合が半分未満であると回答している。また、スピーキングとライティングの両方のパフォーマンステストを実施してい

るのは全学科の35.6%であるという結果が報告されている。さらに、各都道府県及び政令指定都市が策定した「令和4年度英語教育改善プラン」(文部科学省, 2022)¹でも過年度の高1生の「英語表現I」の実態について同様の課題が浮き彫りになっている。同プランから抽出した各都道府県のスピーキングとライティングのパフォーマンステストの「英語表現I」における実施回数は多くても4回、平均回数で1を切る自治体、つまりパフォーマンステストを全く行っていない学校が存在することになる(表1)。また、都道府県が報告した平均回数の分布を見ると、スピーキングで平均年1回程度、ライティングが年2回というのが「英語表現I」の平均的な実態と言えるだろう(図1)。また、17の自治体がスピーキングテストの平均実施回数1回未満である。

表1 各都道府県別平均実施回数の最大値と最小値

	Speaking	Writing
最大値	3.9	4
最小値	0.1	0.1

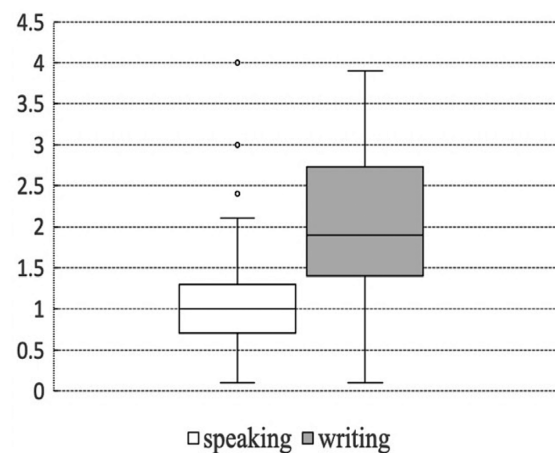


図1 各都道府県の平均回数の分布

「英語表現」の目標は「英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を養う」(文部科学省, 2008, p.8) ことであつた。目標と実際の指導内容と評価の乖離がパフォーマンステストの実施状況1つを見ても容易にうかがえる。

同プランでは、各都道府県が2022年度の「論理・表現I」のパフォーマンステストの目標回数も設定している。各自治体の平均値がspeakingで3.7, writingで

3.9となっている。前年度の実態を考慮すると、学期に一度以上のパフォーマンステストを話すこと〔やり取り〕と〔発表〕及び書くことの3領域で行う「高い目標」を掲げている。津村(2020)は、2018年度「英語教育実施状況調査」の結果を分析し、CAN-DOリストによる学習到達目標の設定校が95%という高い設定率であるのに対して、その達成状況を把握している学校の割合が55.2%であることから、目標と指導と評価の一体化を求めている。この課題の解決は新課程が始まった今年度以降にかかっていると見える。

教科書の問題にも触れておきたい。「英語表現Ⅰ」の主たる教材である教科書が「文法知識の獲得を中心に据えたものである限り、新学習指導要領の目標に定められているような言語の運用力向上を目指す授業を展開するのは難しい」(鶴沢, 2016, p.87)のは事実だが、一方で、文法演習や解説が全面に押し出された教科書が採択率で圧倒的なシェアを得てきたのは、採択する側がそれを求めた結果とも言える。教材をどう活用するかは教師の力量とはいえ、言語活動を中核に据えた授業を行う上でどのような教科書がふさわしいのか、教科書作成と採択側両者が改めて考える必要がある。

指導と評価の一体化や評価の妥当性及び波及効果を考えると、「英語表現」が抱えてきた課題を新課程の「論理・表現」で改善するためには、指導手順や評価方法の確立・普及が急務であると考えられる。小中高一貫した目標の設定とともに段階的に言語活動の高度化を図る学習指導要領の今回の改訂、さらには新観点による観点別評価が導入されたタイミングで「オーラル・コミュニケーション」や「英語表現」の指導が抱えてきた課題が解決の方向に向かわなければ、次回改訂の新科目でもその設定趣旨に同様の課題が並ぶことになるだろう。「論理・表現」が引き継いだこれらの課題の解決は、言うまでもなく学校における教科・科目経営、そしてより具体的にはどのような指導や活動を行うかという年間指導計画や単元の指導・評価計画及びそれらに基づいて実際に授業を行う教師が担うことになる。科目構成や単位数の関係から考えると、「英語表現Ⅰ」と同様に多くの学校が普通科を中心に「論理・表現Ⅰ」を高1の履修科目として教育課程に配置していると予想される。発信系技能の強化を目指す「論理・表現Ⅰ」の指導改善は、単なる1選択科目の

指導改善ではなく、自校の英語教育の改善をどのように図っていくかの試金石になると考える。教科経営の視点から、多くの学校が設定した到達目標と指導や評価をどのように考えるか、改善の余地が大きい科目であるがゆえに学校の指導・評価改善の本気度が問われる科目になると言えるだろう。

最後に、こうした議論の際に忘れてはならないのは、学習者である生徒の立場や意識である。統合的な言語活動を取り入れ、「話すこと」や「書くこと」の技能をより一層重視するはずの「論理・表現」という名称の下で、文法・長文演習や解説中心の授業が行われているとしたら、生徒たちは、設定されたCAN-DOリストの目標に対してどのような自己・相互評価や授業評価を行うのであろうか。仮にそうした授業を求める生徒が多数を占める教室であったとしても、掲げている目標と授業(指導内容)と評価の不一致に戸惑うのではないだろうか。文法指導や練習、ドリルが不要なのではない。言語活動を通して文法や語彙を実際に使う練習を行うことで、改めて文法の必要性や有用性に気づき、論理的に表現することを学んでいくこと、文法事項のより一層の定着を目指していくこと、そして目標と指導と評価の一体化が求められているのである。

1.3 「論理・表現Ⅰ」の指導の在り方

前節で指摘した問題点及び「論理・表現Ⅰ」の趣旨を踏まえ、言語活動を中核に据えた指導のポイントをまとめると、以下の3点になる。

- (1) 社会的な話題を取り上げた言語活動の実施とそのための支援を確実に行うこと。
- (2) 技能統合型の言語活動を取り入れること。
- (3) 目標と指導と評価の関連を意識した単元の指導・評価計画を立案し、それに基づく指導を行うこと。

(1) について、学習指導要領における「論理・表現Ⅰ」の目標は、話すこと〔やり取り〕、話すこと〔発表〕、書くことの3領域について、日常的な話題を扱うとそれに加えて社会的な話題を扱うに分離される。身近な話題を扱うことで即興的なやり取りは行いやすくなるだろう。しかし、社会的な話題もバランスよく扱うことで、ディスカッションやディベート、プレゼンテーション、論理構成や展開を工夫した文章

を書く言語活動をより自然に設定することが可能になるはずである。その際は、目標全てに「多くの支援を活用すれば」とあるように（文部科学省，2018a, p.172-173），教師のモデル提示やオーラル・イントロダクションなどの段階的で多様な支援が必要である。

次に、(2)について、話すこと2領域の目標のイに着目すると、聞いたり読んだりしたことを活用して伝える、伝え合うことが求められている。技能統合型の言語活動を行う目的の1つとして、より自然な言語の使用場面を体験できることが挙げられる。読んで得られた情報をまとめてプレゼンテーションをしたり、聞いて得た情報を基に自分の考えや感想を書いてまとめたりするなどが考えられる。

生徒の実態や英語の習熟度を考慮することは大切であるが、到達目標を達成する上で、学習した文法事項を駆使して話したり書いたりする技能を高めるための言語活動の充実が欠かせない。

また、上記(1)や(2)の実現のためには、言語活動を中心とした単元の指導・評価計画が必要である。段階的な指導・支援や言語活動が1つの単元内に計画的に設定されることで、より高度な言語活動を授業に取り入れていくことが可能になる。また、目標と指導、そして評価タスクの3つの整合性を保つためにも、中間・期末考査まで見通し、生徒の実態を考慮しながら実現可能な指導・評価計画を教師自らの手で作成したい。

2 「論理・表現Ⅰ」のカリキュラム開発の実際

2.1 研究対象校の指導体制と教材

学校現場における指導改善は実行可能性を高める必要がある。指導する教師の指導観や指導スタイルを大きく変化させるのは時間がかかり、クラスサイズ、指導体制、生徒の実態や学校の方針などさまざまな要因が時に指導改善の障壁となる。学習指導要領に基づく理想的な授業像を理解すれば指導が改善し、改善された指導や授業が続いていくのであれば、すでに過去の2改訂でここまで指摘してきた課題は解消したはずである。多くの学校現場の継続的な指導改善につなげるためには、学習指導要領の示す目標に添いながら、各学校の現状や生徒の実態を起点とした実践研究を行う必要がある。

研究協力校・学年・科目及び指導体制等は以下のとおりである。

- ・研究協力校：学校法人大妻学院大妻高等学校第1学年約280名。7クラス編成。
- ・教育課程：普通科のみ。「英語コミュニケーションⅠ」3単位、「論理・表現Ⅰ」2単位を履修。
- ・研究対象科目：「論理・表現Ⅰ」
- ・指導体制：日本人教員4名で7クラスを担当。筆者は1年2・4組2クラスを担当。
- ・使用教材：検定教科書FACTBOOK I English Logic and Expression I（桐原書店）及び付属の文法解説書、問題集、付録資料等

大妻高等学校の教育課程では、「論理・表現Ⅰ」の2単位を、常勤の外国人講師が担当する時間（『OC』と呼ぶ）と、日本人教師が指導する時間（『論表Ⅰ』と呼ぶ）1単位ずつに分けて指導する体制を採用している。本実践研究の主な対象は『論表Ⅰ』である。なお、「論理・表現Ⅰ」の科目の評定は合算して算出している。

2.2 研究課題

大妻高等学校の状況を踏まえ、2022年度1学期より開始した実践研究課題は、以下の3点の計画・試行・改善を通して学校の指導体制や生徒の実態に即した指導・活動手順や評価法などを明らかにすることである。

- (1) 言語活動を中核に据えた単元指導・評価計画
- (2) 新観点「思考・判断・表現」のライティングタスク（課題や定期考査問題）
- (3) 検定教科書で扱われている社会的な話題や題材を生かした技能統合型の言語活動

2.3 研究計画及び手順

前提として、2021年度前半の教科書採択に向けて、「論理・表現Ⅰ」で求められる授業の在り方及び大妻高等学校が目指す授業像について教員間で共通理解・検討を行い、教科書採択時の基準の1つとするなど、研究実施の素地を整えた²。

研究計画としては、指導担当者が決定した段階から連携を図り、上記研究課題を中心とした検討を開始する。外国人常勤講師についても『OC』の中心となる講師と連携を図り、「論理・表現Ⅰ」全体としての整

合性を図る。また、研究課題（1）では、実現可能な単元指導・評価計画や指導の在り方を探るため、1学期に試行し、2学期以降に修正・実践を重ねていく。研究課題（2）では、まとまりのある英文を書く言語活動や課題、定期考査問題の作成、特に「思考・判断・表現」の観点から適切に評価を行うことができるライティングタスクの開発を年間を通して行い、改善を図る。研究課題（3）では、教科書で扱われている題材や言語活動を大胆に精選し実践と改善を重ねることで、1単位の授業で実施可能な技能統合型の言語活動の在り方を探っていく。また、「論理・表現Ⅰ」の授業イメージを英語科で共有するとともに、本実践研究に関するフィードバックを広く得ることができるよう、校内外で授業公開を積極的に行い、授業映像や資料の共有などを行っていく。

本実践研究における新科目のカリキュラム開発の最終目的は、次年度の「論理・表現Ⅰ」に1年間の実践と検証を踏まえたカリキュラム案を提示し、「論理・表現Ⅱ」への示唆を得ること、そして「論理・表現Ⅰ」の指導の在り方を提案することである。年度末にはこれら3点を成果として学校内外で報告・共有していきたい。

3 研究の進捗と成果

3.1 カリキュラム開発の経緯

新課程実施の前年度末から2学期冒頭までの実践研究の経緯を時系列にまとめる。

〈2021年度〉

- ・英語科内教育改革検討チーム及び教科会議にて新課程における授業の在り方を検討し、言語活動を中心とした授業展開が紙面上に見えやすい教科書を採択し、「論理・表現Ⅰ」の授業改善を図る方向性について共通理解が図られた。
- ・3月以降、「論理・表現Ⅰ」のシラバス及び授業イメージを共有するために、授業担当の4名で協議を行った。

〈2022年度〉

- ・4月当初に、筆者がテストスペック案を提示した。また、学習指導要領改訂の経緯や「論理・表現Ⅰ」の目標、指導のポイントなどのガイダンス動画を作成し、担当教員3名が視聴し、オンライ

ンミーティングを行い、科目の趣旨の共通理解を図った。

- ・学校特有の事情（『OC』と『論表Ⅰ』1単位ずつに分けて指導）を踏まえ、指導担当の日本人教員4名及び『OC』を担当する外国人講師で連携し、当該科目の主担当の日本人教師から情報交換や連携の確認をしてもらう体制を整えた。
- ・外国人講師と協議の結果、1学期については、3領域の評価のうち、『論表Ⅰ』が主にライティング、『OC』がスピーキングテストを行うこととした。
- ・4月下旬に英語学習実態調査（アンケート調査）を実施し、実態把握を行った。
- ・5月に最初の評価タスクとしてライティング課題をオンライン配信した。
- ・1学期中間考査以降、『OC』では、主な言語活動・評価タスクとして検定教科書の活動を改善したものを実施した。これにより『OC』と『論表Ⅰ』の関連性が明確になった。
- ・6月下旬に筆者が公開授業を行った。
- ・筆者が発案し、自律的な学習習慣の形成と書く力の伸長を目的として、生徒が内容を自由に選んで英語でライティングなどを行う自主学習の取り組みを夏期休業から取り入れた。
- ・8月初旬に筆者が公開モデル授業実演を行った。
- ・9月初旬に1学期の実践を基に2学期の指導の改善点を担当教員で共有した。

3.2 高1生の英語学習に関する実態

カリキュラム開発に際して、4月に高1生を対象に中学時代の学習実態や意識に関するアンケート調査を実施した。調査は5件法（5：とてもそう思う、4：まあそう思う、3：どちらとも言えない、2：あまりそう思わない、1：全くそう思わない）で行い、有効回答数は223（学年の83.8%）であった。スピーチやディスカッション、ディベート、長めのライティングなどの言語活動が好きだという生徒が少なめで、得意だという生徒の割合がいずれも学年の4割未満である。これらは、新科目「論理・表現」で重点的に扱う領域の言語活動である。その一方で、9割以上の生徒がそれらの言語活動を「高校で頑張りたい」と回答している。言語活動への高い意欲を示す生徒たちに対

表2 英語学習に関する実態調査結果抜粋（*割合はいずれも5と4の回答を合算した数値）

言語活動等の種類	好き	得意	高校で頑張りたい
話の概要や要点を聞き取るリスニング	65.0%	48.4%	97.3%
必要な情報や詳細な情報を聞き取るリスニング	59.2%	40.4%	96.9%
自分の意見や考えを伝えるスピーチ	43.5%	33.2%	91.9%
ディスカッションやディベート	43.9%	30.0%	91.9%
話の概要や要点を読み取るリーディング	65.0%	58.7%	96.9%
必要な情報や詳細な情報を読み取るリーディング	62.3%	52.5%	97.3%
和文英訳や部分的な英作文	68.2%	56.5%	97.8%
意見文や紹介文など長めのライティング	43.5%	38.1%	97.8%

して、発信系の言語活動を重点的に行う「論理・表現 I」の果たす役割と責任は大きい。研究課題に関わる主な調査項目の結果を表2にまとめた。

3.3 教科書単元の扱い方（研究課題(1)について）

使用教科書FACTBOOK English Logic and Expression I（桐原書店）は、言語活動を各ユニットの単元の中核に据えた構成が特徴的である。スモール・トークや生徒同士のやり取りから単元が始まり、「話すこと」の[やり取り]や[発表]の領域の言語活動の後で「書くこと」の領域の言語活動も複数設定されている。さらに複数のユニットの後で、目的や場面、状況などを踏まえたThink Logicallyというまとめの言語活動が設定されている。研究課題を踏まえた上で、担当教員と協議を行い、『論表 I』で実施できる単元構成を考えるために以下の方針を策定した。

- ・生徒の実態を踏まえて、2～3ユニットの社会的な話題から1つを選び単元を構成する。
- ・言語活動を精選し、少ない授業時数でも必ず言語活動を行う。
- ・「話すこと」から「書くこと」の言語活動へ移行する教科書の流れを踏まえる。
- ・教科書に設定された「書くこと」の言語活動を生徒の実態や英語力を踏まえて改変する。
- ・年度の前半（10月中旬2学期中間考査まで）は、社会的な話題に関する映像を教材として用いて「聞くこと」と「話すこと」を基にした「書くこと」の技能統合型の言語活動を考える。

出版社の想定では4～5時間計画で1単元が計画されているが、教科書には主な言語活動及び学習で1単元に13程度設定されており、実際に全て行うとその1.5～2倍近い授業時間数が必要だろう（Appendix A 参照）。1単位の授業では、学校行事等で時に3週間

授業がなくなることもあり得る。実行可能性に配慮した言語活動中心の指導計画を検討し、指導手順を減らし、言語活動から定期考査までが1つの題材で繋がるように単元の基本的な流れを作成した。

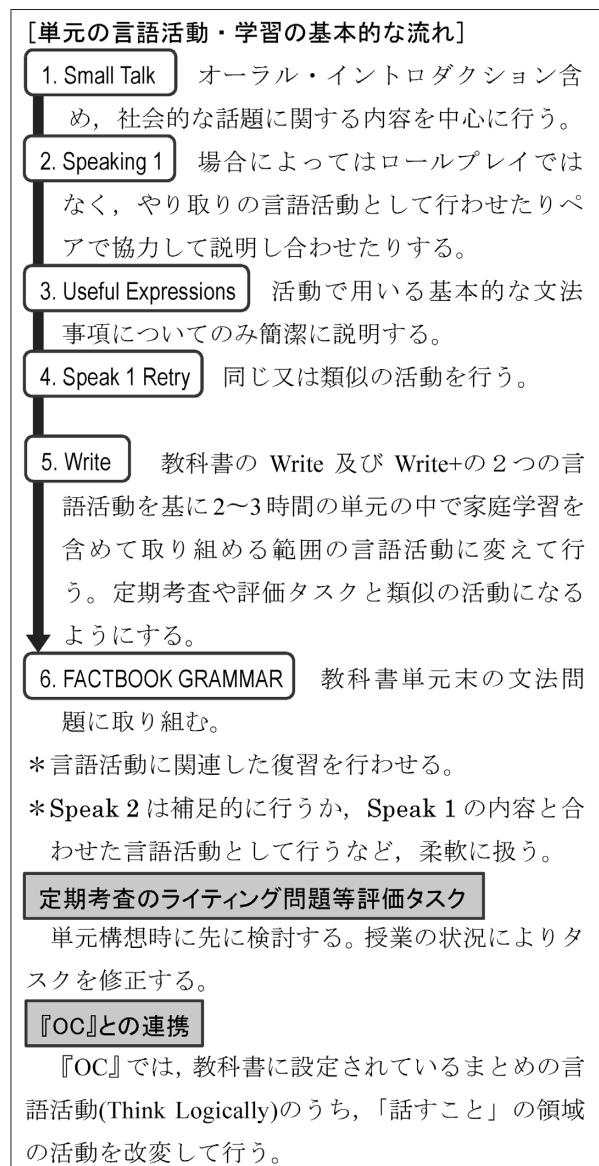


図2 単元の改変案（3時間程度の計画の場合）

3.4 単元指導・評価計画例（研究課題(1)について）

ここでは、単元改変案を基に実際に授業を行った単元を取り上げて具体例を示す³。本単元は、Unit 4 Water supporting our livesという教科書単元で扱う virtual water（以下、VWと呼ぶ）と innovative tools to solve water problemsのうち、VWに焦点を当てて単元を再構成して計画・実践したものである（元々の教科書単元との対比は、Appendix Aを参照されたい）。

（1）単元の目標

VWについて、牛肉とパンに関するメモを使えばその内容を英語で伝え合ったり、自分の意見や考えを根拠とともに書いて伝えたりすることができる。

（2）評価規準

[知識・技能]

物事の説明に必要な受動態の基本的な用法や自分の意見や考えを端的に伝えた表現を理解している。

VWについて、メモを基に伝える技能を身に付けている。

[思考・判断・表現]

VWについて、聞いたり読んだりしたことを活用しながら、情報を伝え合ったり根拠を示して改善案を書いたりしている。

[主体的に学習に取り組む態度]

VWについて、聞いたり読んだりしたことを活用しながら、情報を伝え合ったり根拠を示して改善案を書いたりしようとしている。

日本語を介さずに最後まで粘り強く伝えようとしている。

（3）指導計画（3時間）

1) Small Talk 主発問：What is VW? Why is the idea of VW important?

VWを扱った動画を視聴し、聞き取れた情報をタブレットを用いて全体で情報共有する。その後、教師が英語で説明をしたり、生徒と英語でやり取りをしたりしてVWへの興味・関心を喚起する。

2) Speak 1 主発問：Why is 1,000 liters of water used for one hamburger?

教科書のロールプレイ活動を行う。教科書巻末付録のロールプレイカードを見ながら同じロールの生徒同

士で説明に必要な表現や伝え方を話し合わせるなどの支援を行う。

3) Useful Expressions

Speak 1のやり取りに必要な表現や基本的な受動態について説明するとともに、教科書のモデルダイアローグを聞かせて、受動態の用法や会話のストラテジーを確認する。簡単な口頭練習を行う。

4) 家庭学習

生徒は、授業の復習と予習として、説明する側のロールでSpeak 1に再度取り組み、動画を撮影してGoogle Classroomに提出する⁴。教師は、すべての動画について簡単なフィードバックをClassroom上で行う。

5) Small Talk & Self-Monitoring（第2時）

主発問：You will watch another video about virtual water. Why is the idea of virtual water very important for the country like Japan?

VWに関する背景知識を増やせるように、第1時とは異なる動画を視聴させ、英語で補足説明を行う。

家庭学習として提出した動画をペアで見せ合い、改善点を考えさせる。

6) Speak 1 Retry

主発問：Why is 1,000 liters of water used for one hamburger? Is Japan a heavy user of virtual water?

ペアを変えて前時と同じ活動に取り組む。前時の活動や家庭学習で取り組んだ際の課題を振り返らせ、生徒各自がそれぞれの改善のポイントを意識する。

7) Summary Writing

主発問：Japan has a lot of rain and enough water, but Japan imports a huge amount of water. What does it mean?

Speak 1 Retryのメモを活用しながら、VWについて英語で説明するライティングに取り組ませる。

8) 家庭学習

生徒は、VWを減らすための解決策についてインターネットなどを用いて調べておく。

9) Writing 主発問：What should the government do to reduce VW?

生徒が互いのライティングを見てアイデアや表現の仕方を参考にできるように、自分のアイデアや意見を書いた後、Classroomに提出する。

(4) 1学期期末考査設問案(「思考・判断・表現」)

あなたは、*virtual water*についてブログに投稿することにしました。次のアウトラインに沿って英語でブログ原稿を完成させなさい。(70語以上)

[Outline]

- *What is virtual water?*
- *Is Japan a heavy user of virtual water?*
- *What can Japanese high school students do to reduce virtual water?*

[Your Blog]

Hi, everyone. Today, I'd like to share what I learned about virtual water and know your opinions on my idea of reducing virtual water.

(ここから書き始める)

教科書単元を基に大幅に言語活動を再構成することで、*virtual water*という社会的な話題について、言語活動を中核に据えた単元計画を設定し、実際にその計画に基づいて授業実践を行うことができた。週に一度の授業であることから、家庭学習で行うべき学習や活動を明確にしてガイダンスを行った。期末考査の設問案を筆者が作成し、早めに指導担当の教員間で共有できたため、関連する内容に関して、授業や家庭学習を通して段階的に書かせる支援を行うことができた。

3.5 評価タスク例(研究課題(2)について)

ここでは、3.4の(4)で示した評価タスクについて実際の評価基準や解答例を基に取り組みを整理する。

(1) 期末考査ライティング問題(10点)

1) 「思考・判断・表現」の評価基準

- ア アウトラインの1つ目の問いに答えている。(2点)
- イ アウトラインの2つ目の問いに答えている。(2点)
- ウ アウトラインの3つ目の問いに答えている。(3点)
- * 水問題に対する一般的な対応策ではなく、高校生でもできる*virtual water*の解決法や改善策を具体的に示している⁵。
- エ ブログのフォーマットや指定された語数を守って書いている。(3点)

2) 実際の答案例

実際の答案例を示した。答案Aでは、*virtual water*の解消に国産の食べ物を選ぶことを提案している。また、答案Bは*food waste*を減らすことを提案している。いずれもア～エを満たしていると判断した。

答案A. (73 words)

First, *virtual water* is the water that is used for producing food. It is invisible, so the water that we are drinking is not *virtual water*. *Virtual water* is used for producing beef, tomato, and bread. Japan imports *virtual water* because Japan imports many foods from other country. I think in our country a heavy user of *virtual water*. To solve this problem, we should choose food from our country at a supermarket.

答案B. (87 words)

Virtual Water is invisible. *Virtual Water* is used to many things. For example, a hamburger is made from beef and bread. *Virtual water* is used to grow cattle and wheat. Therefore, a hamburger uses huge amount of water. Our country is a heavy user of *Virtual Water* because we import many food from other country. This means that we import huge amount of water from other country. We can reduce food waste for this problem because foods use a lot of water. Let's try it together.

生徒のライティング中の表現は、言語活動を中核に据えた単元構成と授業実践の中で取り上げたものがいくつか見られる。例えば、VWが仮想のものであることをinvisibleで表しているが、これは教師のSmall Talkや動画で使われていた語である。また、本単元で扱う文法事項の受動態について基本的な表現(is used, is made from)が適切に使用されている。採点の条件「ウ アウトラインの3つ目の問いに答えている」では、高校生としてVWの問題解決や改善にどう取り組めるかアイデアの提示が求められている。授業では、単元の最後を書くことの言語活動として、“What should the government do to reduce VW?”に取り組んだ。個人でできることと比較しながら実際にライティングを行い、考査では逆に個人の立場からの解答が求められた。2クラスでこの条件を全て満たした答案は全体の4割程度であった。多くは水の節約方法などの一般的なアイデアや、政府による対応策などの個人では取り組めない内容を記述していた。

このタスク以外に1学期は書くことで3つ、話すこと[発表]で1つパフォーマンス評価を行った(2学期中間考査を含めると合計6回実施)。

3.6 技能統合型言語活動例(研究課題(3)について)

単元の導入や背景知識の活性化を目的として、映像を見たり題材に関連した英文を読んだりしたことを基に話すことや書くことの活動を行ってきた。ここでは、前節で紹介したVWとは別の2学期最初の単元における技能統合型言語活動の事例を示す。

教科書単元Unit 5 Save food you can still eat! (長沼他, 2022, p.78-89)を「3.3 教科書単元の扱い方」の図2で示した流れに沿って単元を再構成し、3時間計画の単元の中核となる言語活動を以下のように設定した。

〈単元の中核となる言語活動：ライティング〉

food wasteについて学習したことや得た情報を踏まえて、food wasteの問題が少しでも改善するよう、下記のA～Cのいずれかの機関に手紙を書く。

- A. World Food Program (国際機関)
- B. Second Harvest Japan (フードバンク)
- C. 任意の外資系飲食店・チェーン等
(生徒が任意の企業を1つ選ぶ)

次に、単元のゴールとなる上記の言語活動に向けて、技能統合型の言語活動として、以下の2つの活動を行った。

- 1) food wasteの映像視聴を行い、メモしたことを基に英語でやり取りを行う。
- 2) food wasteに関する短い英文やグラフを読み取り英語で伝え合う。

1) では、food wasteの概要を分かりやすくまとめた3分程度の動画とfood wasteがもたらす影響を説明した4分程度の動画の2本を視聴した。1本目の後に「food wasteがなぜ問題なのか」、「食べ物を捨てるのは良くない」、と生徒から反応があった。道徳的・倫理的な観点以外の理由について推測させ、ペアで話し合わせた。次に2本目の動画でfood wasteがもたらすさまざまな状況について理解するとともに、1学期の既習単元virtual waterとの関連について発問し、ペアで話し合わせた後で、生徒が1学期末考査のライティングで解答した英文⁶を用いて説明した。

2) では、food wasteの国別の状況を取り上げたグラフやfood wasteを減らす取組を行っている大手スーパーを取り上げた英語の記事を抜粋しリライトした英文を読み、情報を確認したり感想を伝え合ったりする言語活動を行った。

いずれの技能統合型言語活動においても、背景知識を活性化させ、情報を共有するための支援として、Google ClassroomのJamboardの機能を用いて、生徒から動画やfood wasteに関する興味深い情報のリンクを共有させた(図3)。映像については、生徒が推薦したものを技能統合型活動に活用し、授業中に全員で視聴した。本実践研究において、あらかじめ想定していた指導・支援の方法ではなかったが、統合型言語活動を行う上で1つの示唆が得られたと考える。この点については、次章で考察したい。

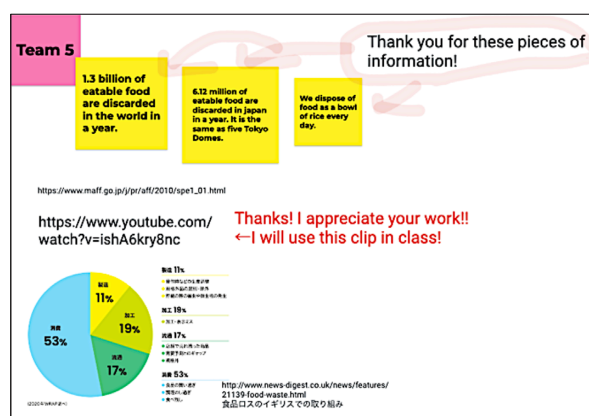


図3 Jamboardによる背景知識補充の取り組み例

4 考察(教育的示唆及び今後の課題)

4.1 研究課題(1) 言語活動を中核に据えた単元指導・評価計画について

複数の出版社の新科目「論理・表現I」の検定教科書を確認すると、詳細に分析したわけではないが、「英語表現I」と比べて言語活動を取り入れ、指導手順が見えやすくなっている傾向にある。しかし、言語活動を含む単元の構成や指導手順は教科書により異なり、また、教科書紙面上からは見えにくいものもある。発信系の3領域を扱う「論理・表現I」の場合、50分2単位の授業の中で効果的に言語活動を行うためには、特に教科書における言語活動の配置と設定した目標に対して単元全体を通してどのように言語活動を行っていくか、具体的な単元計画が求められる。実践研究対象校ではFACTBOOK English Logic and Expression I (桐原書店)が採用されているが、「言語活動→中間指導・評価・介入→言語活動に再度取り組む」という流れが特徴の教科書である(Appendix A参照)。学校の実態や教育課程に対して教科書で想

定される指導・活動内容が多ければ、言語活動を行わないのではなく、教科書単元に軽重をつけたり減らしたりした上で、単元を改変して言語活動を中心とした指導計画を再構成する設計力が求められる（津久井、印刷中）。教師の指導力として、これまで以上に指導と評価を一体的に含む単元構成力が求められる。言語活動1つとっても、教科書通りの設定で行うのではなく、生徒の実態や習熟、設定した目標との関連から言語活動をカスタマイズする力が重要になるだろう。大妻高等学校の例で言えば、2単位分（1学期で18時間相当）の教科書単元を実際は8時間で行ったが、極端に少ない授業時間数という制約の中で指導内容や言語活動、評価タスクを担当教員と検討をすることで、かえって「単元は学校の教員が目標を設定して独自に構想・カスタマイズするものである」という意識を担当教員間で共有できたことは成果の1つであったと考える。

今後の課題として、家庭学習支援の在り方が挙げられる。単元の指導・評価計画に家庭学習支援を組み込んだ単元計画を開発・実践・検証していきたい。その際、言語活動の前後の支援や活動やアウトプットで要求される英語の種類、活動の形態などの基準を設けることで言語活動のタスク性を高めたい（Willis & Willis, 2007, p.157）。これは、単元間の活動のバランスや系統性を考えるのにも役立つであろう。また、指導の効率化、個別最適な学習という視点から家庭学習支援を考えると、タブレット端末等の活用方法も有効な手立ての1つとなり得るだろう。大妻高等学校では生徒全員がChromebookを持ち、インターネット環境も十分に整っており、一部試行的に家庭学習で言語活動の復習を行う取り組みを実施したが（3.4 単元計画例参照）、どのような家庭学習支援を行うことが言語活動の充実に資するのかを明らかにしていきたい。

4.2 研究課題（2）新観点「思考・判断・表現」のライティングタスク（課題や定期考査問題）について

新しい観点による観点別評価が本年度より導入された高等学校の現場では、観点に基づく評価自体に慣れが必要である。目的や場面、状況の設定の変化によって話したり書いたりする内容や構成、英語の表現の変化を「思考・判断・表現」の観点から見とるために、

主としてライティングタスクを2学期中間考査までの3回、全ての定期考査で実施した。さらに、考査とは別に1回テストを実施し、課題として類似のライティングタスクを2回、合計6回継続的に実施することができたのは、その都度担当教員4名で検討をしてきたため、また、回を重ねるたびに「思考・判断・表現」の観点や評価タスクづくりへの共通理解が深まったためだと考える。2学期開始時の筆者の担当2クラスで実施した夏期休業明けの実態を把握するアンケート調査⁷では、82.4%の生徒が「『論表I』の授業でもっと英語で書く「活動」（例：自分の意見や考えなどを書く等）をしてみたい」と回答している。また、87.8%が「単語や文法を覚えるには、書く「活動」（例：自分の意見や考えを書く等）をするのが大切だと思う」と回答している。1学期の言語活動を中心とした授業実践やカリキュラム開発を継続させる上で生徒の意欲や意識の高さは大きな支えとなるはずである。

今後の課題は、第一に考査外でのライティングテストの実施である。1学期に実施した際は評価に時間がかかり過ぎたことが課題となった。評価についての共通理解が深まってきたので、今後の実施を検討したい。第二に、評価タスク自体の検証が不十分である。3.4の（4）の評価タスクを例に取ると、アウトライン自体もしくは順序を生徒自身が考えることが論理性の1つの要素であり、生徒自身が展開を考える要素を入れたタスクを実施し、生徒へのアンケート調査などを通して分析を進めたい。第三に、スピーキングテストを実施している『OC』との連携や両パフォーマンスの相関などの分析である。本来は1つの科目として指導する領域の言語活動について、別々の教員が指導しているため、評価タスクや評価方法の点でも共通理解を図り、より効果的な指導につなげていく必要がある。

4.3 研究課題（3）検定教科書で扱われている社会的な話題や題材を生かした技能統合型の言語活動について

使用している教科書は、SDGsに紐付けて日常的な話題から社会的な話題まで題材として取り上げており、単元を精選したり改変したりして再構成する際にどの社会的な話題を扱うか、生徒の興味・関心の把握、そして何より、話したり書いたりするために必要

な背景知識の見極めが重要である。なぜなら、「英語コミュニケーションⅠ」のように教科書本文がなく、背景知識を得るのに十分な英文や授業時間がないからである。その際にポイントとなった考え方や手立ては3点ある。

第一に、適切な映像の使用である。ICTの発達により、インフォグラフィックや分かりやすいアニメーションなどを用いた説明動画は豊富にある。視聴後のアウトプットで何を求めているかを明確にしておくことで動画選定の1つの基準をもつことができる。例えば、food wasteがもたらす影響について話したり書いたりする言語活動へ結び付けるのであれば、food wasteそのものを詳しく説明する動画ではなく、環境問題や経済格差などのグローバルな問題へのつながりを示した動画がふさわしい。また、教師のオーラル・イントロダクションやインタラクションの力も欠かさない。動画中で使われている英語のレベルやスピードが生徒の英語力に合っている場合の方が少ないだろう。教師の映像視聴前後の支援として、英語で映像の内容に関連する発問をして生徒と英語でやり取りをしたり、平易な表現で補足説明をしたりする指導力が求められる。

第二に、生徒の興味・関心の観点から生徒の日常生活との関連が見えやすい部分を取り上げることであり、限られた時間数で取り上げた社会的な話題と自分自身や身の回りの生活との関連が見えることで、生徒が自身の感想や考えなどをもちやすくなるだろう。この「自分や身の回りの生活との関連」をキーワードに、2学期の10月中旬までsmart city（自動運転機能は必要か）、virtual water（高校生としての解決のアイデアは何か）、food waste（なぜ食料廃棄の問題が重要なのか）の3単元を計画した。スマートフォンの普及によりAIは身近になってきている。また、自動翻訳についても担当クラスの78.4%の生徒が使用したことがあるという実態がある⁸。virtual waterについては、生徒に人気のあるハンバーガーを扱った言語活動が教科書に設定されていたことや、food wasteとのつながりも視野に入れてそれぞれ教科書単元のテーマの扱い方をかなり限定して設定している。1学期期末考査のvirtual waterとfood wasteを関連させたライティングの例（p.8 答案B参照）は、food wasteの単元を扱う前だが、生徒自身が問題の背景を考えて表現

する言語活動を継続的に行っていくことで問題の背景や影響を関連させて考えている。この生徒のように問題を関連付けて表現できる生徒を一人でも多く育てられるとよい。

今後の課題は、背景知識を活性化し発話内容を充実させるための動画や読み物資料の更なる工夫である。food wasteの単元では、背景知識の共有や学習方法の共有で使用しているJamboardに勧められていた映像資料から2つを選んで、技能統合型の言語活動で使用したが、生徒が選んだ動画を使用することで取り上げた社会的な話題や関連動画を英語で視聴することへの関心が高まるのか、生徒への聞き取りや質問紙調査などで把握しておきたい。授業中の生徒の反応や活動への取り組みの様子を記録した筆者の授業記録⁹によると、少なくとも好意的に受け止めてもらえたようである。本実践研究で体系化することは難しいが、引き続き実践を蓄積する中で研究上課題となる部分を明確化していきたいと考えている。さらに言えば、各教科書単元には文法事項が紐づけられており、完全に生徒主体に任せることは難しいが、教科書で取り上げられている社会的な話題自体を生徒が選択するなど、より生徒の主体性を高めた取り組みも考えられるだろう。

4.4 「英語コミュニケーションⅠ」との連携

当初の研究課題にはなかったが、本実践研究課題（1）～（3）における研究課題における実践研究を進める上で新たに生じた問題点を解消するための方策として「科目間連携の強化」の可能性に触れておきたい。

前節では、家庭学習を含めたより総合的な単元指導・評価計画、テストの検証と『OC』とのテスト内容や方法の連携、そして技能統合型の言語活動を行う際のインプットの充実を今後の課題として挙げたが、必修科目「英語コミュニケーション」（3単位）の学習内容、特に教科書本文で扱ったテーマを生かした技能統合型の言語活動を行うことで、社会的な話題について聞いたり読んだりするインプットの充実を図ることができる。どの単元を科目間で連携するか、あらかじめ十分な計画が必要となる。これは、インプットを主として扱う「英語コミュニケーションⅠ」の担当教員との連携は不可欠である。なぜなら、どのような言語活動をアウトプットとして行うのかを

理解することで、リスニングやリーディングでどのような言語活動を行うのが明確になるからである。学校現場の実情を考えれば、授業進度も両科目、さらにはクラスによって大きく差が生まれることもあるため、実行可能性は現時点では高いとは言えないが、実現すればより充実した言語活動が行えるはずである。また、学校で設定したCAN-DOの到達状況を知るために年に1～2回「英語コミュニケーションⅠ」＋「論理・表現Ⅰ」の5単位で大単元を構成し、学年の英語科目担当全員で指導や評価に当たることで、生徒の実態を把握した上で各担当科目で指導を重点化したリ指導の成果を検証したりする機会を得ることができる。担当教員の指導観や授業スタイルの共有、共通理解を深めるきっかけにもなるのではないだろうか。単元限定の「科目統合」とも言える試みだが、本実践研究の中でも、「英語コミュニケーションⅠ」の担当教員と連携し、可能な範囲で試行してみたい（図4）。

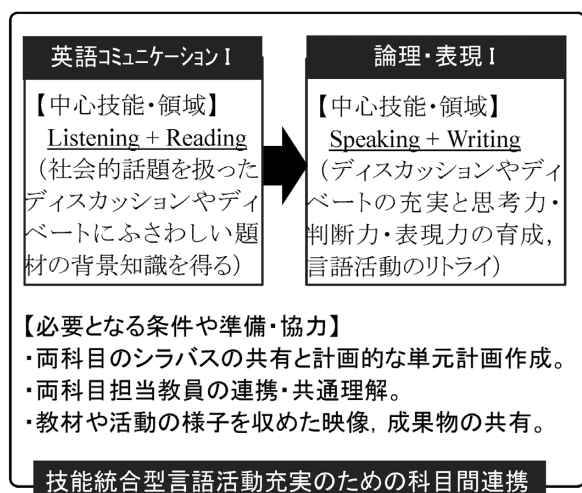


図4 科目関連連携の在り方

本格的な科目間連携ではないが、1つの試みとして、2学期中間考査で計画した、「思考・判断・表現」を見るライティングの評価タスクで「英語コミュニケーションⅠ」の教科書題材と連携させた取り組みの事例を紹介する。

〈ライティング〉

あなたは、動物学者で自然保護を唱えるJane Goodallさんに手紙を書くことになりました。まず自己紹介をし、次にfood wasteが環境に与える問題点を挙げ、解決策を提案してみましょう。手紙の最初は既に書かれているので、その後を70語以上の英語で書きなさい。

「英語コミュニケーションⅠ」の教科書単元では、動物学者Jane Goodallが環境問題の啓発や若者の環境問題への取り組みを促す教科書本文を扱っている（霜崎他，2022，p.76-90）。目的や場面、状況の設定として、Jane Goodallに手紙を出すのであれば、「英語コミュニケーションⅠ」での学習内容や情報を背景知識として、Janeの取り組みや若者へのメッセージに触れた手紙の内容や構成が期待される。

上記の科目間連携によるライティングタスクは、両科目を担当し、かつ「英語コミュニケーションⅠ」と『論表Ⅰ』及び『OC』の連絡調整を担当する学年の主担当の教員が提案したものである。「英語コミュニケーションⅠ」の教科書題材や『論表Ⅰ』の単元計画との関連性を把握し、社会的な話題について技能統合型の言語活動を行う意義を理解しているため、このような提案が可能であったと考える。本稿執筆時点では考査答案が手元にないが、今後は生徒の解答を分析するとともに、「英語コミュニケーションⅠ」との連携を模索するヒントとしたい。

5 研究全体の今後の見通し

新科目のカリキュラムを1から作り上げる過程において、本稿は10月初旬（2学期中間考査前）までの途中経過報告の段階である。授業時間数で言えば、年間の半分程度が終了したところである。テストの解答やアンケートの回答・自由記述の分析など、成果検証を行い、それらを反映した修正を加えたものを次年度のカリキュラムとして提案する必要がある。50分1単位の授業における実践で英語の技能の伸長を成果検証として求めるのは難しいかもしれないが、約5ヶ月間、家庭学習への支援も含めて研究対象として含めることで、自律性や意欲の部分での変化を見ることはできると考える。生徒自らが学習内容を選択して主にライティングを行う自主学習ノートの取り組みが夏期休業から始まっており、本年度後半の実践研究ではさらに充実させていきたい。言語活動の実施や指導スタイルの共通理解が進み、考査でのライティングの評価タスクやパフォーマンステストの実践が本格的に開始する2学期以降は、生徒の意欲や学習観、学習習慣への影響などを質問紙調査やインタビューを通して分析を行い、検証していく予定である。新課程の新科目の指導

方針から検討し実践し改善していく経験をした他の担当教員3名への聞き取り調査も行うことで、より多くの視点からカリキュラム開発を行う上での知見を得ておきたい。さらに、前章で示した新たな視点について具体化した単元計画を作成し、可能であれば大妻高等学校英語科の協力を得て実践し、その課題や成果を共有したい。

「英語表現」が文法解説及び演習となってしまった背景や問題点を踏まえ、言語活動と文法が決して相反するものではなく「コミュニケーションを支えるものであること」(文部科学省, 2018a, p.473)を学校現場の具体的な姿で示すことができるよう、言語活動を通してコミュニケーションの資質・能力の育成を目指す授業スタイルや指導手順の確立を目指す。教員間で連携を図りながら年間を通して、言語活動や指導と評価の一体化を意識した科目経営を行い、計画→実施→検証→改善を繰り返し、研究成果を広く還元していきたい。

謝辞

大妻中学高等学校で「論理・表現Ⅰ」の指導を行いながら、新課程におけるカリキュラム開発を行うことにより、実行可能な指導・評価方法の開発に関する示唆や知見を得る貴重な機会をいただくことができました。非常勤講師として週1回の指導を行いながらの研究は、学校管理職や英語科、特に「論理・表現Ⅰ」担当の先生方、時間割などを調整する教務部、そして大妻の生徒たちのご協力なしには実現しない試みであり、ここに記して感謝申し上げます。

注

- 「第3期教育振興基本計画」(平成31年6月15日閣議決定)において策定を求められた各地方自治体の英語教育に関する施策をまとめたもので、文部科学省のウェブサイトに掲載されている。茨城県のみテストの実施回数が資料から読み取れなかったため、分析から除外している。
- 筆者は、2020~21年度の2年間、大妻中学高等学校の専任教員として英語科副主任及び英語科内に立ち上げられたプロジェクトチームの一員として「論理・表現Ⅰ」のカリキュラム開発を検討してきた。
- 本単元の実践は、筆者が担当する2クラス中、津久井(2022b)の実践の修正・改善後に2クラス目で行ったものである。
- 生徒たちはChromebookを一人1台持っている。また、Google Classroomを学習用プラットフォームとして全校で使用している。
- 「蛇口の水を出しっぱなしにしない」、「ペットボトルの水を飲みかけのまま放置しない」などの対応策はvirtual waterの問題に直接的に関係がないため、この条件を満たしたことはないかと判断した。
- 本稿p.8の答案B。1学期期末考査時点では、food wasteの単元を学習していなかったが、生徒自身がvirtual waterとfood wasteの関係や影響について言及して意見を述べている好例である。
- 言語活動を中心としたカリキュラム開発では、当事者である生徒自身の意欲・意識を把握しておくことが重要である。学校現場における文法・長文演習中心の指導への支持は根強く、その根拠にしばしば生徒がそう望んでいることが挙げられるが、生徒の実態を正しく捉えなければ適切な指導改善は図れない。
- p.10で言及したアンケート調査中の別項目の回答結果より。
- 2学期はGoogle Classroomの共有ドキュメントとして担当教員間で共有していく予定である。

参考文献

- 石井康教(2020).「Q16 CEFR-J Grammar Profileを文法指導にどのように活かしますか」投野由紀夫, 根岸雅史(編)『教材・テスト作成のためのCEFR-Jリソースブック』, 84-90. 大修館書店.
- 鶴沢文子(2016).「高等学校新学習指導要領における『英語表現Ⅰ』教科用図書:伝える能力と文法指導」『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要』51. 81-89.
- 霜崎實・岩佐洋一・大堀壽夫・河野力・阪下ちづる・滝田裕幸・津久井貴之・辻本千鶴子・中田敦予・松原一宣・望月尚子・由井ロバート・渡辺靖・George Deaux・Ann Slater・石黒文雅・亀谷みゆき(2022).『CROWN English Communication I』三省堂.
- 中央教育審議会の初等中等教育分科会教育課程部会教育課程部会外国語ワーキンググループ(2016).『外国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめについて(報告)』文部科学省.
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377057_1_1.pdf (最終閲覧日2022年10月10日)
- 津久井貴之(2022a).「高校授業のNEXT PHASE 授業と指導の変化にチャレンジ!第3回 言語活動の指導手順を変えよう」『英語教育』71(3), 14-15.
- 津久井貴之(2022b).「生徒との英語のやり取りと支援の工夫に焦点を当てた授業づくりー『論理・表現Ⅰ』の取組を通してー」. 英語授業研究会第33回全国大会 高校授業実践報告資料.
- 津久井貴之(印刷中).「高等学校「英語コミュニケーションⅠ」の教科書の比較分析ー単元構成及び領域統合型言語活動

- に焦点を当てて一』『群馬大学共同教育学部紀要 人文・社会科学編』72.
- 津村敏雄 (2020). 「英語教育実施状況調査」の経年的研究』『東洋学園大学紀要』28, 142-163.
- 長沼君主, 下村明, 布村奈緒子, 萩原一郎, 藤田義人, 和田朋子 (2022). 『FACTBOOK I English Logic and Expression』桐原書店.
- 文部科学省 (2008). 高等学校学習指導要領 (2008年告示). 文部科学省.
- 文部科学省 (2018a). 『高等学校学習指導要領 (平成30年告示)』
- 文部科学省 (2018b). 『高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説 外国語編 英語編』
- 文部科学省 (2021). 『令和3年度「英語教育実施状況調査」の結果について』
https://www.mext.go.jp/content/20220513-mxt_kyoiku_01-000022559_4.pdf (最終閲覧日2022年10月10日)
- 文部科学省 (2022). 『令和4年度英語教育改善プラン』
https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1418086_00006.htm (最終閲覧日2022年10月3日)
- 文部省 (1978). 『高等学校学習指導要領 (昭和53年告示)』国立教育政策研究所教育研究情報データベース
<https://erid.nier.go.jp/files/COFS/s53h/chap2-7.htm> (最終閲覧日2022年10月10日)
- Akmal, S., Masna, Y., Tria, M., & Maulida, T. A. (2020). EFL Teachers' Perceptions: Challenges and Coping Strategies of Integrated Skills Approach (ISA) Implementation at Senior High Schools in Aceh. *Indonesian Journal of English Language Teaching and Applied Linguistics*, 4(2), 363-380.
- Council of Europe. (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge University Press.
- Ellis, R. (2003). *Task-based language learning and teaching*. Oxford University Press.
- Ellis, R., & Shintani, N. (2014). *Exploring language pedagogy through second language acquisition research*. Routledge.
- Ellis, R. (2018). *Reflections on task-based language teaching*. Multilingual Matters.
- Ellis, R., Skehan, P., Li, S., Shintani, N., & Lambert, C. (2019). *Task-based language teaching: Theory and practice*. Cambridge University Press.
- Graham, S. (2019). Changing how writing is taught. *Review of Research in Education*, 43(1), 277-303. <https://doi.org/10.3102/0091732X18821125>
- Willis, D., & Willis, J. (2007). *Doing task-based teaching*. Oxford University Press.

(つくい たかゆき)

Appendix A

教科書 (FACTBOOK I) に提示されている活動・指導手順例 (1単元5時間の設定)

単元 : Unit 4 Water supporting our lives	
1. Small Talk	・ How much do you drink a day? If we cannot use water, what will happen? などの発問とともにスモール・トークや生徒との英語によるやり取りを行う。
2. Listen	・ 水についての対話文を聞き、日本が多くの水を輸入していることを知る。
3. Listen Again	・ 同じ対話文を聞き、会話方略 (communication strategies) を学ぶ。
4. Speak 1	・ なぜハンバーガーに大量の水が使われているか、表の情報を使って英語で説明し合うロールプレイ型の言語活動 (やり取り) を行う。Why is 1,000 liters of water used for one hamburger? と尋ねてやり取りを始める。
5. Useful Expressions 1	・ Speak 1で使える表現や文法を、例文を使って学ぶ。 A hamburger is made from beef and bread. 930 liters of water is used for 45 grams of beef. など
6. Speak 1 Again	・ やり取りの SCRIPT を読み、やり取りをさらに続ける会話方略を学習した後で再度同じ活動に取り組む。
7. Speak 2	・ 発展途上国の水不足に役立つ寄付の計画として、困っている人に適した道具を伝え合うロールプレイ型の言語活動 (やり取り) を行う。What problem did you read about in the article? と尋ねてやり取りを始める。
8. Useful Expressions 2	・ Speak 2で使える表現や文法を、例文を使って学ぶ。 It is called Hippo Roller. It is designed to transport water by rolling it. など
9. Speak 2 Again	・ やり取りの SCRIPT を読み、やり取りをさらに続ける会話方略を学習した後で再度同じ活動に取り組む。
10. Write	・ 道具購入の寄付を募るポスター (道具の説明文) を書く。
11. Write More	・ 道具購入の寄付を促すメッセージを書く。
12. Write More+	・ Write, Write More で書いた英文を校正する。
13. FACTBOOK GRAMMAR	・ 文法の復習や演習を行う。

*長沼他(2022, p.60-69.)より。1～13の通し番号及び各活動・指導手順の説明は筆者による。